

追悼文

嶋崎裕志先生を偲んで

In Memory of Prof. Hiroshi Shimazaki



穏やかなご指導と温かなお人柄を偲んで

In Memory of His Gentle Guidance and Warm Personality

堀内 隆彦・千葉大学

Takahiko Horiuchi, Chiba University

日本色彩学会を代表し、嶋崎先生のご逝去に際し、心より哀悼の意を表します。

嶋崎先生との最初の出会いは、2010年に開催された「納谷嘉信記念シンポジウム－新しい色彩学を目指して－」の準備の席でした。当時、学会の会長を務められていた嶋崎先生と打ち合わせをする機会を得た私は、若輩者でありながらも、先生が大変丁寧で温かく接してくださったことを鮮明に覚えています。そのお人柄の優しさと深い包容力に触れたことが、今でも忘れられません。その翌年には、庶務理事として嶋崎会長のもとで共に学会運営に携わる機会を得ました。目白の学会事務局において、学会の法人化やAIC2015の準備、事務局体制の整備について、毎回20名ほどの理事や支部長と共に活発な議論を交わした日々が思い出されます。時には意見が対立し、議論が白熱する場面もありましたが、嶋崎先生は常に穏やかな物腰で議論を見守り、冷静に調整しながら、場を和やかにまとめてくださいました。その手腕には、誰もが敬意を抱いていたことと思います。とりわけ先生は、賛助会員の充実と拡大に力を注がれました。賛助会員の重要性を深く理解され、自ら関連企業を訪問し、学会の趣旨を熱心に説明される姿が印象に残っています。現在もなお、賛助会員の拡充は学会の課題のひとつですが、先生の遺志を受け継ぎ、今後も努力を続けてまいる所存です。また、この年、東日本大震災が発生し、このときは大変深く心を痛めておられました。被災された会員約50名の会費免除を実現し、千葉大学で開催された全国大会では募金箱を設置するなど、積極的に被災者支援を推進されました。その行動の一つひとつが、先生の温かいお人柄を物語っています。

振り返れば、嶋崎先生の優しい笑顔と、誰に対しても公平で親しみやすく接してくださった姿ばかりが思い出されます。学会のために尽力された先生の多大なる貢献と生前のご厚情に深く感謝いたしますとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2004年全国大会の思い出

A Memory of 2004 Annual Meeting

高橋 晋也・東海学園大学

Shin'ya Takahashi, Tokai Gakuen University

昨年末、学会事務局からの連絡で嶋崎裕志先生の訃報に接し、ただただ驚くばかりでした。先生とはしばらくお目にかかっていませんでしたが、毎年の年賀状でお変わりなくお過ごしの様子を拝しておりましたので、ご体調を崩されているとは夢にも思いませんでした。

嶋崎先生は名古屋大学文学研究科心理学研究室の先輩というご縁もあり、私が学生の頃からご高誼を賜りましたが、もっとも懐かしく思い出されるのは2004年に名古屋大学で開催した第35回全国大会のことです。当時東海支部長であられた嶋崎先生自らが実行委員長となり、会場校に勤務していた私が大会事務局を務めました。この大会の成功に向けた嶋崎委員長の熱意は並々ならぬものがあり、実行委員をお務めいただいた東海支部役員の皆様とともに周到に準備を進めました。中でも個人的に印象深いのは、NHK放送技術研究所の谷岡健吉氏に特別講演の依頼をすべく、二人で世田谷区砧まで足を運んだことです。メールでのやり取りのみで直接の面識はなかったため、快くお引き受けいただけるか心配もありましたが、嶋崎先生の熱意が通じ、めでたく実現に至りました。その日、名古屋へ帰る新幹線車中で、二人とも興奮冷めやらぬまま、他の企画を含めた大会構想を語り続けたことを覚えています。

当時の実行委員会議事録を振り返り気づきましたが、特別講演の他にシンポジウムという形態の企画を盛り込んだこと、大会参加費の前納割引制度を導入したことは、この大会が初めてだったようです。どちらも今では当たり前の施策ですが、これらの新しいアイデアも元は嶋崎先生の「よい大会にしたい」というお気持ちから生まれたことを知り、あらためて感慨深く思います。

嶋崎裕志先生は、日本色彩学会をもっとも愛された会員のお一人だったと確信しています。その多大なご功績に敬意を表しつつ、心よりご冥福をお祈りいたします。